

「戦争一度と」語り続け

「ニッポン・クルー」

続・Uボートの記憶

③

ドイツ中西部の静かな集落ガッケンバッハ・デイスで暮らすUボートの元乗組員エミール・ワグナーさん(91)にとって、日本は「特別な国」だった。潜水艦の修理で寄港し、占領下まで滞在した神戸でその思いを強めることになったという。

最新鋭の中型潜水艦「U511号」を日本に譲渡した後、乗組員は約2週間の休暇をとり、神戸港に集合した。1943(昭和18)年10月初

特別な国

め、輸送船でシンガポールに向かった。日独の潜水艦が共同で連合国側と戦っていた。接収したイタリアの潜水艦3隻Ⅱなどに分乗。砲弾にも使われるタンクステンといった希少金属や生ゴムなどの軍事物資を積み、ドイツへ輸送することになった。

「乗艦したのはUIT24号。操艦のためイタリア人数も乗り込んだ。インド洋で給油を受けるはずだったが、その燃料を積んだタンカーが連合国側の攻撃を受け、戻ることになった」

「積み荷を砂糖や食料などに入れ替え、日本に輸送した。途中、台風を避けるために潜航し、船体が海底にぶつかって損傷。私はひさを打つて動けなくなった。神戸で艦を修理する間、六甲山のホテルで静養した」

神戸に寄港した時期ははっきりしないが、45年2月から続いた神戸大空襲の前らしい。負傷したワグナーさんを慰問した神戸市在住のドイツ人家族と知り合い、六甲山の別荘などに遊びに行っていたという。

「ドイツ敗戦後、兵士らに民間パスポートが渡された。宿舎の六甲山のホテルに、旧海軍兵士を含め100人以上はいた。同山中に隠した倉庫に食料が十分あり、外出はわりと自由だった」

連合国軍の占領期間中も同じホテルに収容されたが、待遇は変わらなかったらしい。

「U511号を呉港に回航後、旧日本海軍の案内で訪れた大分・別府で記念撮影。前列右がエミール・ワグナーさん。下「日本語をもっと学びたかった」と話すエミール・ワグナーさん。ドイツのガッケンバッハ・デイス

日課の散歩 出会う人に

広島、長崎に原子爆弾が投下されると、「一発で街を破壊する爆弾だ」と耳にした。後に、占領軍の米士官は「日本が降伏しなかったら、ほかの街にも投下していたと話した。47年2月、元乗組員は横須賀から米軍輸送船「マリン・ジャンパー」で帰国の途についた。民間人も含め約1200人が乗船し、ドイツ北部のブレーマーハーフェンへ。同国内の収容所に移されて簡単な尋問を受けた後、帰宅が許された。

「輸送船でも厨房で働き、乗務員の食事をつくった。給与の代わりに、たばこが配給された。帰国後、そのたばこを売ってパンを買った」

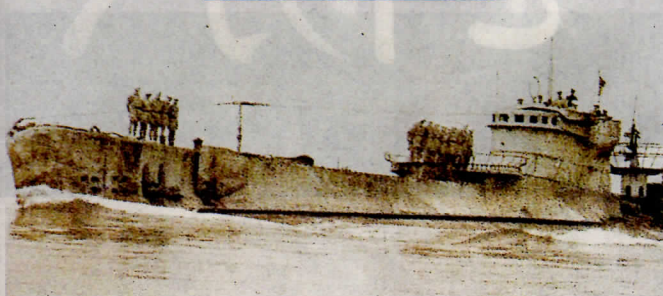
87年から88年にかけて夫婦で世界一周旅行をした。日本にためだ」

「悲惨な戦争を繰り返さないためだ」



イタリア潜水艦

1943年9月にイタリアが無条件降伏し、日本海軍はシンガポールに寄港中のイタリア潜水艦3隻を接収した。UIT23号、24号Ⅱ写真Ⅱ、25号で、同年10月、ドイツ海軍に無償譲渡された。23号は44年2月、マラッカ海峡で英潜水艦に撃沈され、24号と25号は45年5月のドイツ敗戦当時、神戸港で修理中だった。2隻は同月、日本に引き渡されて伊号第503潜水艦、同504潜水艦と命名された。いずれも実戦に投入されることなく敗戦を迎え、46年に紀伊水道で海没処分された。

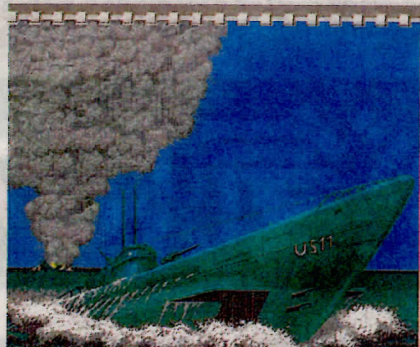


帰国まで4年体験記

「ニッポン・クルー」

続・Uボートの記憶

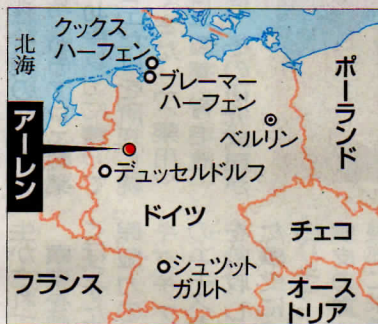
4



U-511

明るい緑色の船体に、「U511」の艦名。後方で敵船が爆発炎上する――。
ドイツ潜水艦「Uボート」の活躍を描いた表紙をめくる。戦時中に日本へ航海し、「抑留」を経て、戦後に帰国するまでの4年間の体験が8巻にまとめられていた。
ドイツ北部の町クックスハーフェンにある「Uボートミュージアム」（潜水艦資料

一家の宝物



館）で、U511号の元乗組員ウィルヘルム・キウルピックさんが寄贈した手記を見つけた。所在を捜すと、昨年7月、88歳で亡くなったという。家族が体験記を書くよう勧めたと聞き、同館から約250キロ南方の町アーレンの自宅を訪ねた。

長男で、郵便局に勤めるベルンハルトさん(56)は「生前に来てくれたら、どんなに父が喜んだことか」と残念がった。「これが体験記の原本」と見せてくれたのは、本文40ページほどの詳細なものだった。
ウィルヘルムさんは海軍学校などで教育を受け、19歳になった1942年秋、U511に配属された。日本への回航当時、魚雷担当の上等水兵だった。
「子どものころ、U511が(艦上から)ロケット(兵器)を発射した初めての潜水艦だったと知り、興奮した。父は勤勉な潜水艦乗りで、い

息子の勧め 半年かけ

ろいろなことを話してくれた。おもしろそうだから書き残すように勧めた」
80年代後半に潜水艦資料館を訪ねた後、90年代に入って半年以上かけてつづった。ベルンハルトさんの妻ウルズラさん(54)が体裁を整え、タイプを打った。
日本滞在中に日独兵士が交流した様子をとらえた写真アルバムを、家族は大切に保管している。
「このアルバムを父は大事にしていた。テレビで京都の映像が出ると、『自分も行っただぞ』とボツリ。富士山のときは『あの山のふもとに泊まった』。相撲を紹介すると、『見物した』。日本は好きな国だったと思う」とベルンハルトさん。体験記を読んだ感想を次のように語った。
「彼は運が良かったと思える。潜水艦を日本の天皇に贈

ることになり、危険だった大西洋の作戦からはずされた。(日本に潜水艦を譲渡後、新たに配属された)イタリアの潜水艦は不良品で、修理でドックに停泊ばかりしていた。敗戦後も日本で丁重に扱われ、食糧事情もよかった」
4年ぶりに帰宅した当時、あまりに太っていたため兄弟でもすぐには気づかなかったという。
帰国後、ウィルヘルムさんは地元の炭鉱で働き、機械の整備や修理を担当した。友達付き合いは少なく、日本に滞在した旧海軍兵士らの集い「ニッポン・クルー」には一度も出席しなかった。
晩年、老いた父を元気づけようと、家族は潜水艦のことをよく話題にした。U511の体験記は、一家の宝物になっている。



U511号に乗り込んだ日本人の一人で、当時ドイツ駐在の海軍代表委員だった野村直邦さん(故人)は生前、航海記録を著書「潜水艦U・511号の運命」に記した。だが、ドイツ人乗組員の体験記で日本に紹介されたものはほとんどない。次回、ウィルヘルムさんの手記の概要を紹介する。

①ウィルヘルム・キウルピックさんがつづった日本回航の体験記の表紙。U511号の船体が描かれている②「思ひ出」と書かれた日本のアルバムを手に、U511号の乗組員だった父が残した手記について語るベルンハルト・キウルピックさん③ドイツ・アーレン④日本で撮影された日独兵士らの交流。手前左がウィルヘルムさん